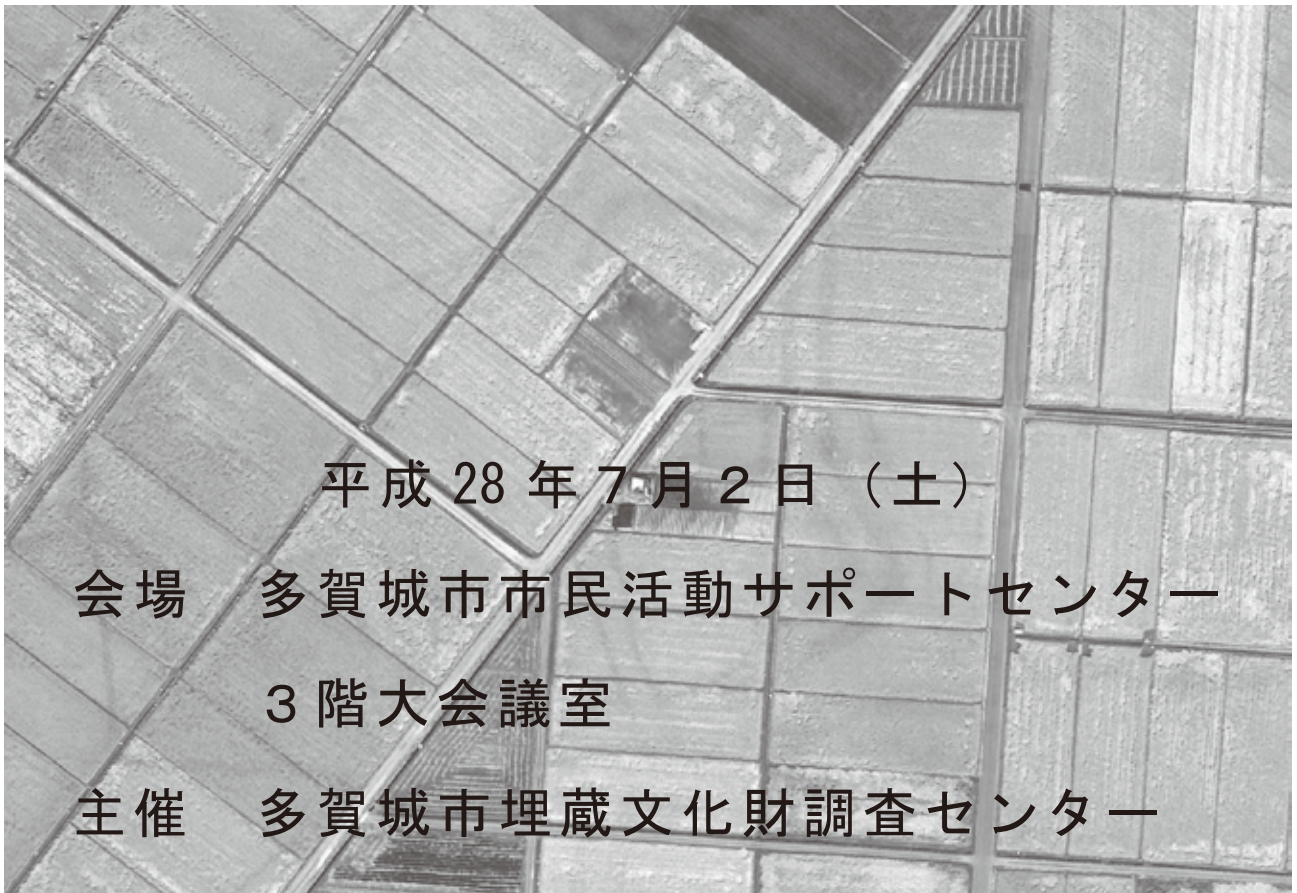
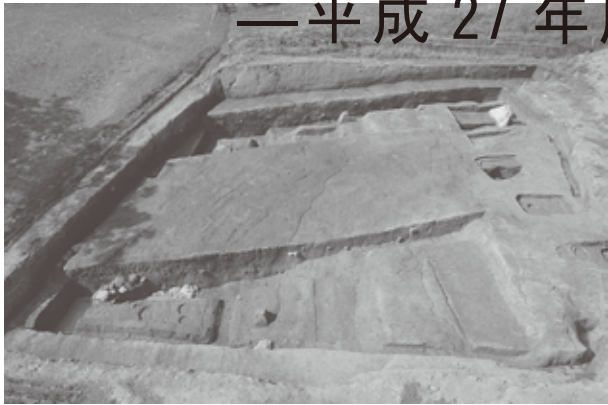


多賀城市遺跡調査報告会

—平成 27 年度の調査成果—



平成 28 年 7 月 2 日 (土)

会場 多賀城市市民活動サポートセンター
3 階大会議室

主催 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市遺跡調査報告会

1 開会 13:30

開会挨拶 多賀城市教育委員会 教育長 菊地 昭吾

2 報告

(1) 新田遺跡第103次調査

多賀城市埋蔵文化財調査センター 相澤 清利 13:40～14:00

(2) 多賀城跡第88・89次調査

宮城県多賀城跡調査研究所 廣谷 和也 14:00～14:40

休憩 14:40～14:50

(3) 高崎遺跡第102次調査

多賀城市埋蔵文化財調査センター 石川 俊英 14:50～15:10

(4) 内館館跡第1次調査

多賀城市埋蔵文化財調査センター 永井 三郎 15:10～15:30

3 閉会

閉会挨拶 埋蔵文化財調査センター 所長 板橋 秀徳 15:30

※閉会后 速報展見学 埋蔵文化財調査センター 3階展示室

新田遺跡第103次調査

1 調査要項

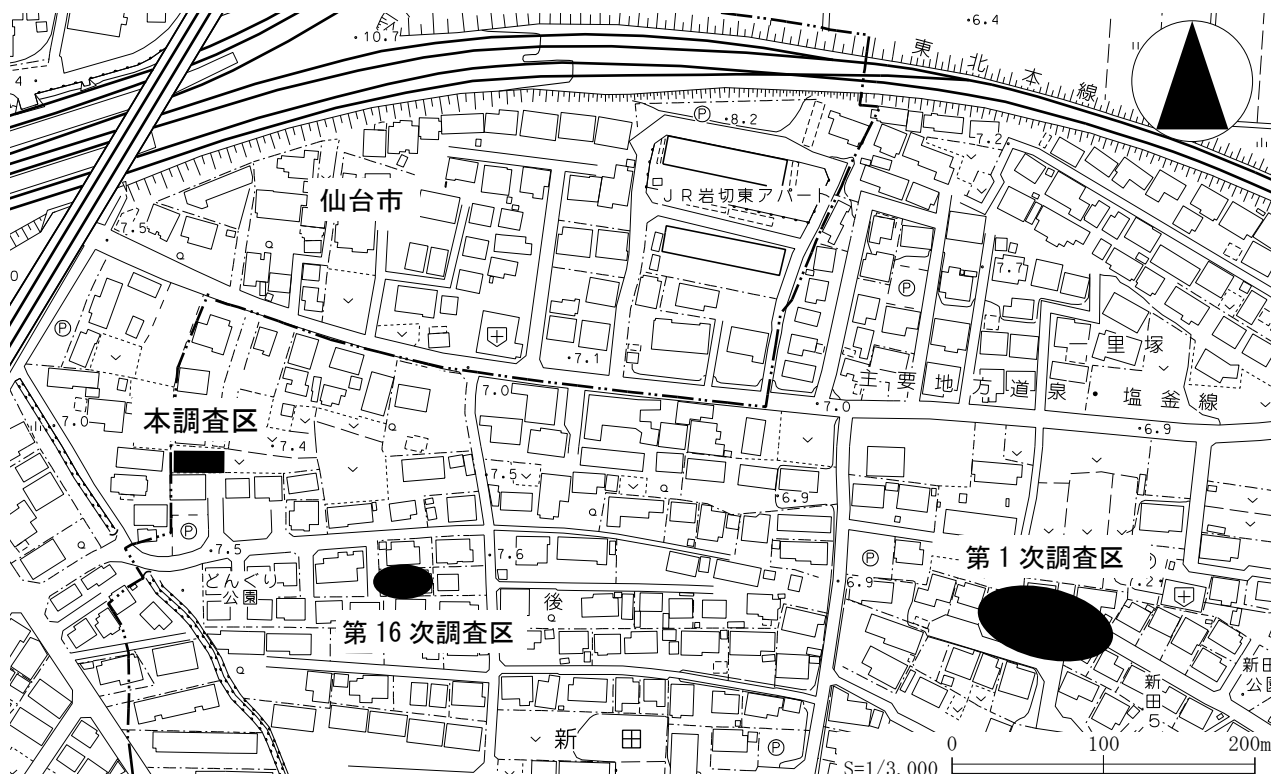
所在地	多賀城市新田字後27-2
調査原因	個人住宅建築
調査面積	55 m ²
調査期間	平成27年5月27日～平成27年6月25日

2 遺跡の概要

新田（にいだ）遺跡は、本市西部の新田地区と山王地区にまたがるよう位置し、その範囲は東西約0.8 km、南北約1.6 kmの広さを有しています。標高5～6 mの微高地に立地し、縄文時代から中世（主に鎌倉・室町時代）にかけての遺跡として知られています。特に中世では大小の溝で区画されて屋敷跡が多数発見されています。このうち、寿福寺（じゅふくじ）地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられています。

3 調査成果

今回の調査では、竪穴住居跡、溝跡、小溝群（畑跡）等を発見しました。ここでは時代ごとに記述していきます。



第1図 本調査区と本稿で取り上げた調査区位置図

【中世】

南北方向の溝跡（溝跡1）を1条発見しました（第2図）。長さ4.9m以上、幅0.6～1m、深さ30cmを測ります。

【平安時代】

東西方向の溝跡を2条発見しました（第2図）。溝跡2は長さ7.8m以上、幅50cm、深さ20cm、溝跡3は長さ10.7m以上で、1度改修を行っていました。新しい方は幅1.1m前後、深さ50cmに改修し、埋土中には10世紀前葉に降下したとされている灰白色火山灰が堆積していました（写真3）。

【奈良時代】

竪穴住居跡2軒を発見しました（第3図）。竪穴住居跡1は竪穴住居跡2が廃絶した後に造られました。東西3.8m、南側は溝3に壊されていますが、南北2m以上の大きさです。はじめに深さ約70cmの掘方を掘った後、約15cmの厚さで土を埋め戻し、平らな床を貼りました。そこからの壁の高さは50cm以上はあったものと推測されます。煮炊き用のカマドは北辺の中央に造られていたようですが、廃絶時に壊されており残存していませんでした。しかし、その痕跡として直径20cmほどの被熱による硬化面（焼面）が中央あり、その周辺には煮炊きに伴う灰や焼土が薄く堆積していました。また、煙道（屋外に排煙するためのトンネル）が住居から北側に1.4m伸びていますが、天井は崩落していました。崩落した土には、炭や煤が大量に混じっていました。カマドの南西付近では当時煮炊きに使っていた土師器（はじき）と呼ばれる甕が5個体まとまって出土しました。住居廃絶時にまとめて捨てたものと考えられます。なお、竪穴住居に通常付設される周溝や屋根を支えるための柱をすえた穴（柱穴）は発見されませんでした。

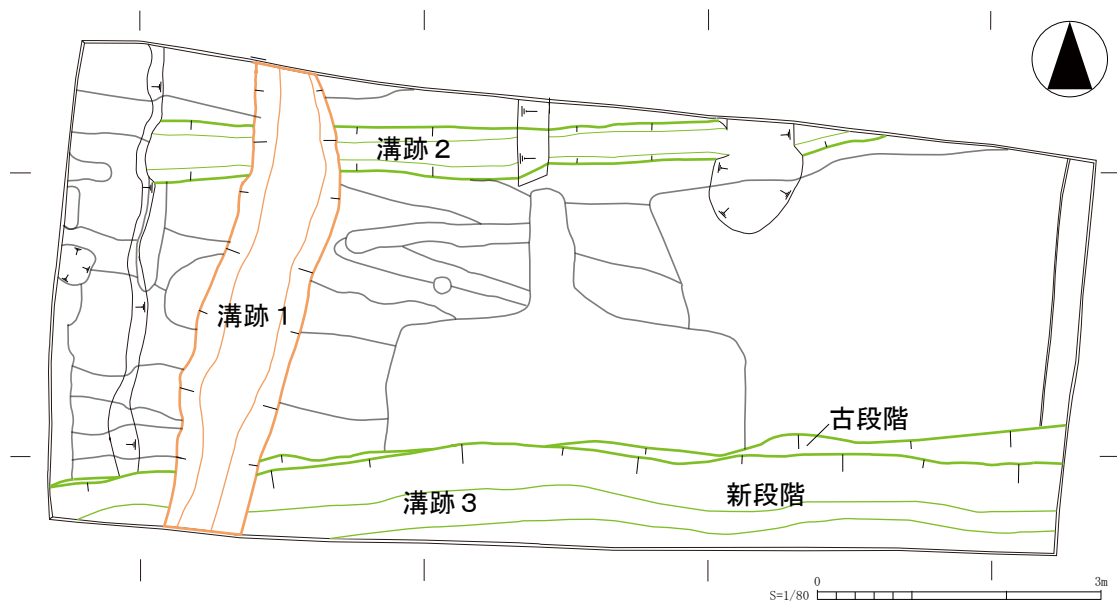
この他に住居1よりも古い住居2も発見しましたが、北西隅付近が確認されたのみですが、P1がカマドに関係するものであると住居1の倍の大きさはあったものとみられます。

【古墳時代～奈良時代】

竪穴住居跡よりも古い時期のもので、東西・南北方向の小溝群が発見されました（第3図）。方向、規模、埋土等の類似性や位置関係から3つに分類されたことから、3時期の変遷が想定されました。このような形態の遺構（いこう）は畑の畝溝（うねみぞ）と考えられています。

4 まとめ

- (1) 中世の溝跡は、本新田地区では多数発見されており、大規模なものや方形を呈するものは、武士の屋敷を区画するものと考えられています。今回発見した溝跡もそれに関係するものかもしれません。
- (2) 平安時代の溝跡は、東西という方向性を意図して構築されたものとみられます。



第2図 溝跡平面図 (古代・中世)



写真1 溝跡2・3検出状況 (西より)



写真2 溝跡1・2・3完掘状況 (西より)

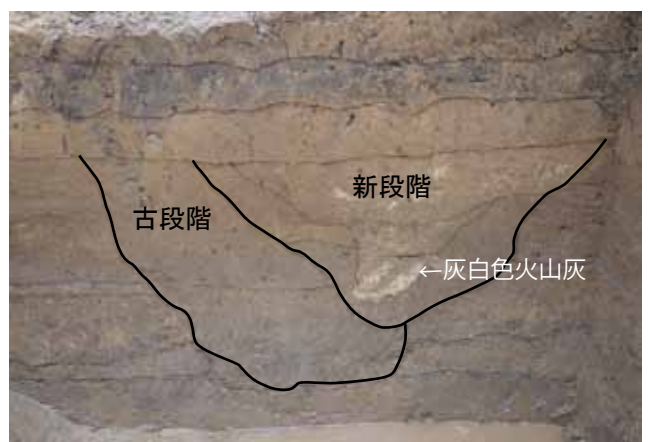
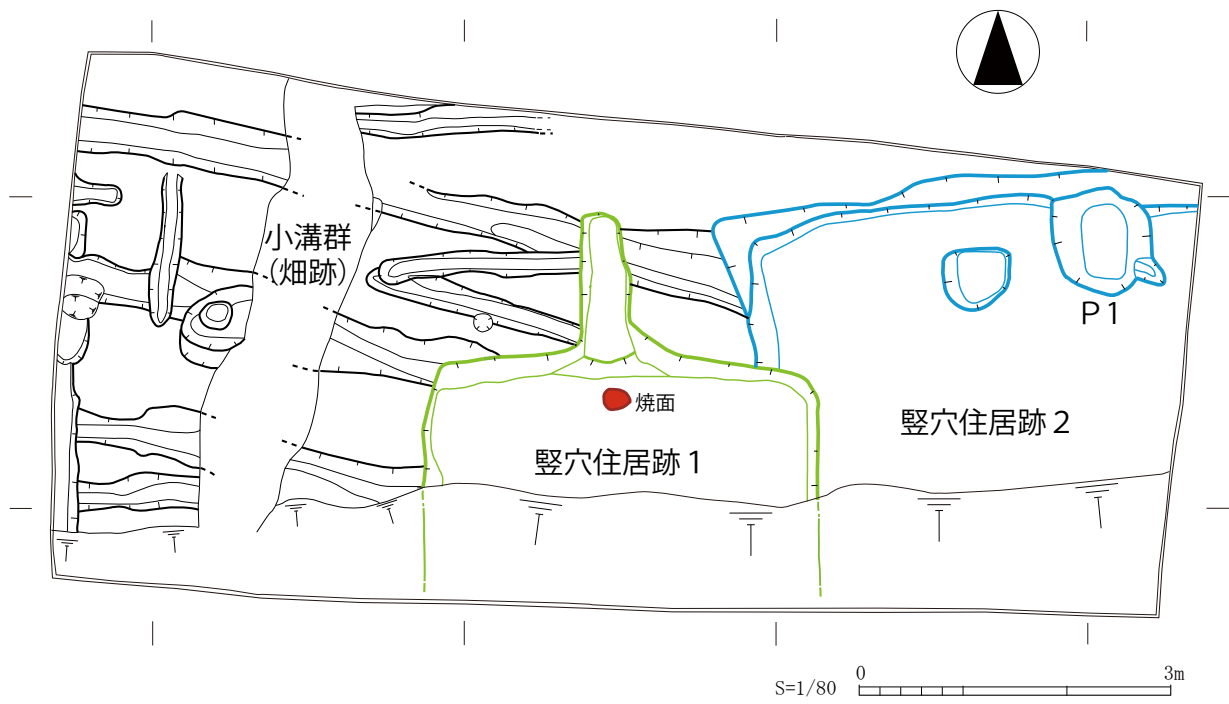


写真3 溝跡3土層堆積状況 (西より)



第3図 竪穴住居跡・小溝群（畑跡）平面図



写真4 竪穴住居跡1 完掘状況（南より）



写真5 竪穴住居跡1 カマドの調査状況（南より）



写真6 竪穴住居跡1 土師器甕出土状況



写真7 小溝群（畑跡）完掘状況（西より）

埋土に灰白色火山灰を含む同時期の溝は、本調査区の東方約 100 m に位置する第 16 次調査区（第 1 図）でも発見されています。この溝跡は真北方位をとり、本溝跡とは直交することから、方形を意識した区画を想定することができます。本地区は多賀城南面一帯に施工された方格地割りの外であり、このような方位に規制された溝の性格について考察するのは難しいのですが、たとえば、小溝群との関係を考慮した場合には、耕作域の地境を示すものなどが考えられます。

(3) 奈良時代の竪穴住居跡の年代については、出土した土師器甕（はじきかめ）や杯（つき）の年代観から 8 世紀中頃～後半と考えられました。新田遺跡北部の自然堤防上では、奈良時代の竪穴住居跡の分布が散発的であることから、多賀城との関わりが相対的に低い地域とされています。しかしながら、本遺跡後地区においては、第 1 次調査区（第 1 図）で同時期の住居跡が 4 棟発見されており、そのうち 1 棟からは銀環（ぎんかん）（銀メッキされた耳飾り）が出土しています。このような特殊な遺物も出土することから、多賀城南面一帯に居住した人々との関係（階層差など）が今後の課題となります。

(4) これまでの市内で発見された小溝群（畑跡）は、平安時代のものが大多数です。これより古い時期のものはごく少数例しかなく、今回の発見は古代の人々の生業を考えるうえで大変貴重な事例となりました。

※参考資料(新田遺跡第 1 次調査の竪穴住居跡と出土した銀環)



竪穴住居跡



竪穴住居跡の周溝から出土した銀環



竪穴住居跡に付設されたカマド



銀環

多賀城跡第 8 8 次調査

1 調査要項

所在地：宮城県多賀城市市川字立石

調査指導：多賀城跡調査研究委員会（委員長 佐藤 信）

調査主体：宮城県教育委員会（教育長 高橋 仁）

調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所（所長 山田 晃弘）

調査協力：多賀城市教育委員会

調査期間：平成 27 年 7 月 23 日～平成 28 年 1 月 14

調査面積：約 390 m²

2 調査の目的

多賀城跡調査研究所では、昭和 44 年以来、特別史跡多賀城跡の発掘調査を計画的に実施し、遺跡の実態解明に向けた研究をしています。近年は多賀城の外周りを囲む外郭施設についての調査を進めており、今年度は立石（外郭南辺東半）地区の調査を実施しました。

外郭南辺は、東西方向に 870m にわたって延びており、ほぼ中央に南門が設けられています。今回調査したのは、今でも土塁状の高まりが残る外郭南辺東半の中央部で、周りには低湿地が広がっています。近年の調査で、多賀城の第Ⅱ期（762～780）以降の外郭南辺は、第Ⅰ期（724～762）の位置から約 120m 南側に移ったことがわかってきましたが、今回の調査では、それをこの場所でも確認するとともに、第Ⅱ期以降の外郭南辺の残存状況・構造・変遷などを明らかにすることを目的としています。

3 主な調査成果

(1) 築地塀について

土塁状の高まりのほぼ中央で、築地塀 (SF202) と両脇の嵩上げ整地 (SX3273～3278) や寄柱の跡などを検出しました。築地塀は、低湿地の地盤を強化するために大規模な基礎盛土 (SX1114) をした上に造られています。本体は高さ 1.1～1.2m ほどが残っており、幅は一番下の基底部で約 2.7m あります。また、積み直しによる補修が 3 回行われたことがわかりました。そのうち 2 回目の積み直しは調査区全体に及ぶもので、大きな改修だったとみられます。

築地塀の両脇には、「犬走り」を含む平らな面がつくられています。10～30cm の厚さの整地による嵩上げが 3 回みられ、合計 4 つの面があることがわかりました。築地塀が立ち上がる部分では寄柱を立てた上面が平らな礎石が 2 個見つかっています。

築地を造る前には、地盤強化のために南北幅 15m、高さ 1.0m 以上の基礎盛土が行われています。その南北両端では、土留めのしがらみ (SA1113・1126) に伴う径 10cm 程度

の丸材が 30 ～ 40cm 間隔で打ち込まれています。

最初の嵩上げ整地には、焼土と共に、表面が火熱ですすけたり、はがれ落ちている焼け瓦がふくまれていました。こうした瓦は、宝亀 11 年 (780) の伊治公咎麻呂の乱の際に火災に遭ったことを示す資料とみられるため、最初の築地塀が第Ⅱ以前の築造であると考えられます。また、灰白色火山灰が降った第Ⅳ期 (869 ～) 中の 10 世紀前葉までには最後の嵩上げ整地が終わっており、貞観 11 年 (869) の「貞観の大地震」の際に補修があった可能性も考えられます。

(2) 櫓について

調査区の中央で、築地塀に取り付く櫓 1 (SB3281) ・ 2 (SB3287) ・ 3 (SB3282) ・ 4 (SB3283) を検出しました。櫓 1 から 4 の順番で建てられており、1 ～ 3 はほぼ同位置で建て替えられています。櫓 1、は最初に築地塀が造られた第Ⅱ期以前に築地塀と一緒に建てられ、伊治公咎麻呂の乱後に 2 回の建て替えが考えられます。

櫓 1 ～ 3 は築地塀をまたいで建てられており、櫓 3 は東西 3 間 (6.4m)、南北 2 間 (5.6m) の建物です。それぞれ土だんや整地の造成と共に建て替えられており、建物の構造は、1 ・ 2 が掘立式、3 が礎石式です。第Ⅱ期以前の櫓はこれまで外郭東辺では見つかったいましたが、今回の調査で南辺にもあることが判明しました。

櫓 4 は東西 3 間 (9.6m)、南北 1 間 (2.1m) 以上の礎石式の建物で、3 回目の嵩上げ整地の上に建てられています。築地塀の北側のみで礎石とその根石が見つかっており、南側を築地塀の上に乗せる構造の櫓とみられます。2ヶ所に残る礎石は長さ 60 ～ 70cm の上面が平らな石で、そのうちの 1 つには柱を立てる位置の目印として十字の線が刻まれています。

4 まとめ

- ・この場所の築地塀と櫓の詳しい状況が明らかになりました。第Ⅱ期以前には築地塀や櫓の補修が無いことから、この場所に外郭南辺が造られたのは第Ⅱ期の可能性が高いとみられます。
- ・櫓は、この場所に外郭南辺が造られた当初からあり、南辺でも第Ⅱ期以前の櫓の存在が判明しました。また、平安時代には礎石式の櫓が建てられたことがわかりました。これまで、多賀城内で礎石を使った櫓は部分的に見つかったのだけでした。規模や位置がわかる形で見つかったのは、古代東北の城柵遺跡のなかでも初めてのことです。
- ・遺物は、瓦を中心に 300 箱ほど出土しました。出土した大量の瓦は、櫓や築地に葺かれていたとみられます。ほかには、少量の土器と木簡が 5 点出土しています。木簡は北側の湿地から出土しており、小さな断片がほとんどですが、帳簿とみられるものもあります。

多賀城跡第 89 次調査

1 調査要項

所在地：宮城県多賀城市市川字城前

調査指導：多賀城跡調査研究委員会（委員長 佐藤 信）

調査主体：宮城県教育委員会（教育長 高橋 仁）

調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所（所長 山田 晃弘）

調査協力：多賀城市教育委員会

調査期間：平成 27 年 5 月 18 日～11 月 16 日

調査面積：約 280 m²

2 調査の目的

当研究所では、今後政庁から南門にいたる地域の環境整備を重点的に実施していく予定です。その整備に先立つ補足的な調査として、政庁南門と外郭南門を結ぶ政庁南大路と、城前地区官衙のある城前地区で第 90 次調査を実施しました。

今回調査したのは、政庁南門から 100～110m ほど南に位置する、近年まで宅地として使用されていてこれまで未調査だった場所です。今回の調査では、政庁南大路と、城前地区官衙北西部の残存状況・構造・変遷などを明らかにすることを目的としています。

3 主な調査成果

（1）政庁南大路について

政庁南大路については奈良時代が 13m 幅、平安時代以降が 23m 幅で使用された直線道路であること（第Ⅲ・Ⅳ期）などが分かっていたましたが、今回はそれら二つの時期の東側側溝と盛土を確認しました。これまで見つけていた道路と同様、標高の高い東側の丘陵を削りだして西側に土を盛ることで平坦面を造成したものとみられます。今回の調査で、13m 幅道路は 116m 分、23m 幅道路は 98m 分について、側溝を伴う道路であることが分かりました。

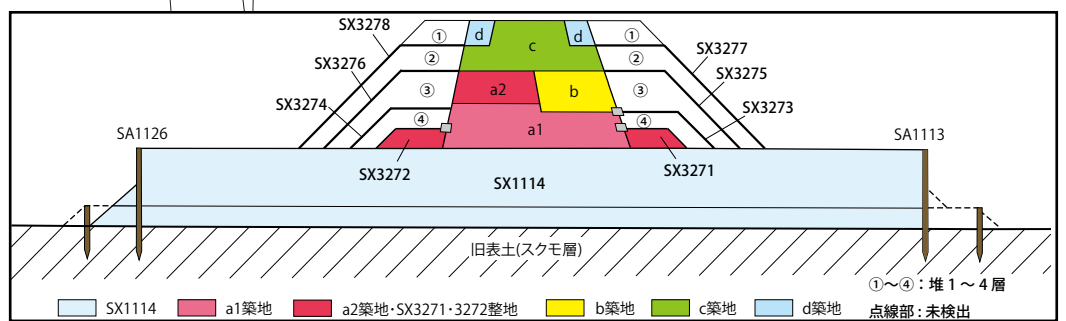
（2）城前地区官衙について

城前地区官衙については奈良時代後半（第Ⅱ期）に A 期官衙がつくられ、宝亀 11 年（780）の蝦夷の反乱による火災の後に B 期官衙が再建されていることなどが分かっていたました。今回は、各時期の北西部の建物や柱列を新たに検出し、建物群の左右対称性をほぼ全体で確かめることができました。さらに、A 期官衙に伴うとみられる土壙から、城前地区官衙の機能を示すとみられる複数の木簡が出土し、中でも鎮守府を示す「府」の文字が書かれた文書箱は、多賀城全体の性格を考える上でも大変貴重な発見となりました。

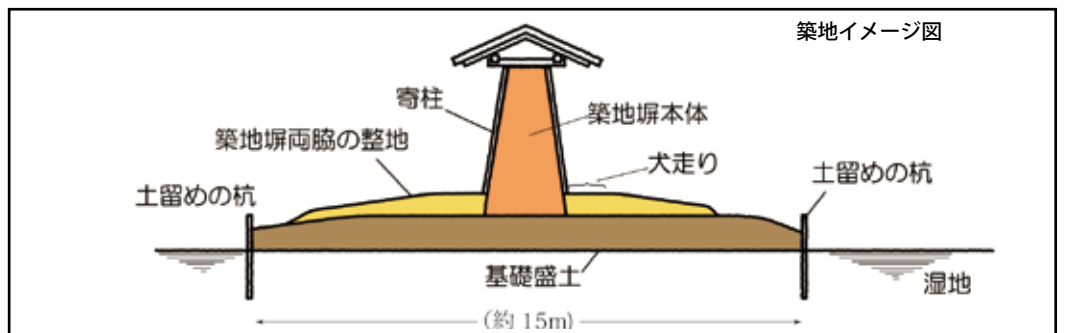


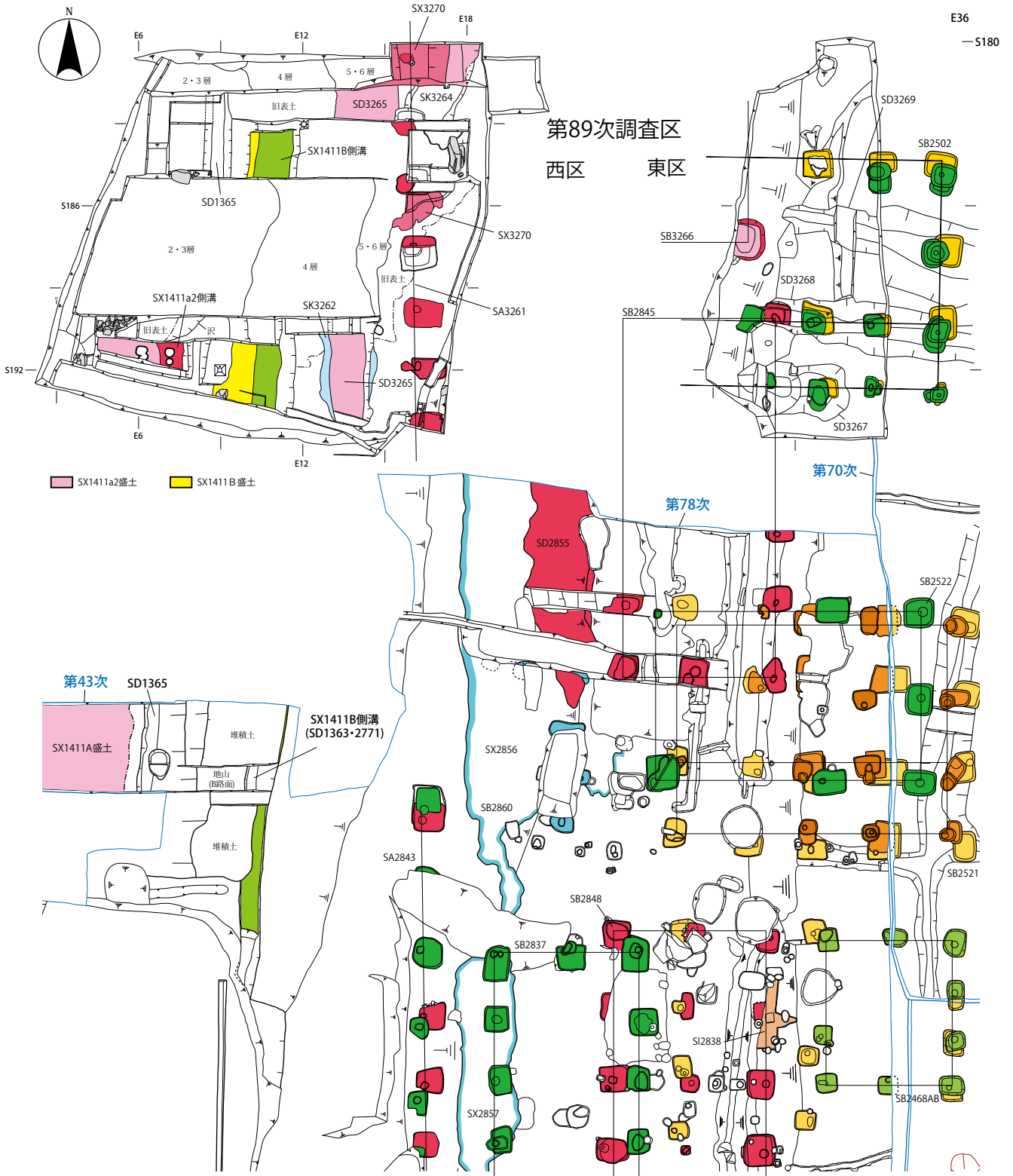
第2図 第88次調査区平面図

第3図
築地模式図



第4図
築地イメージ図



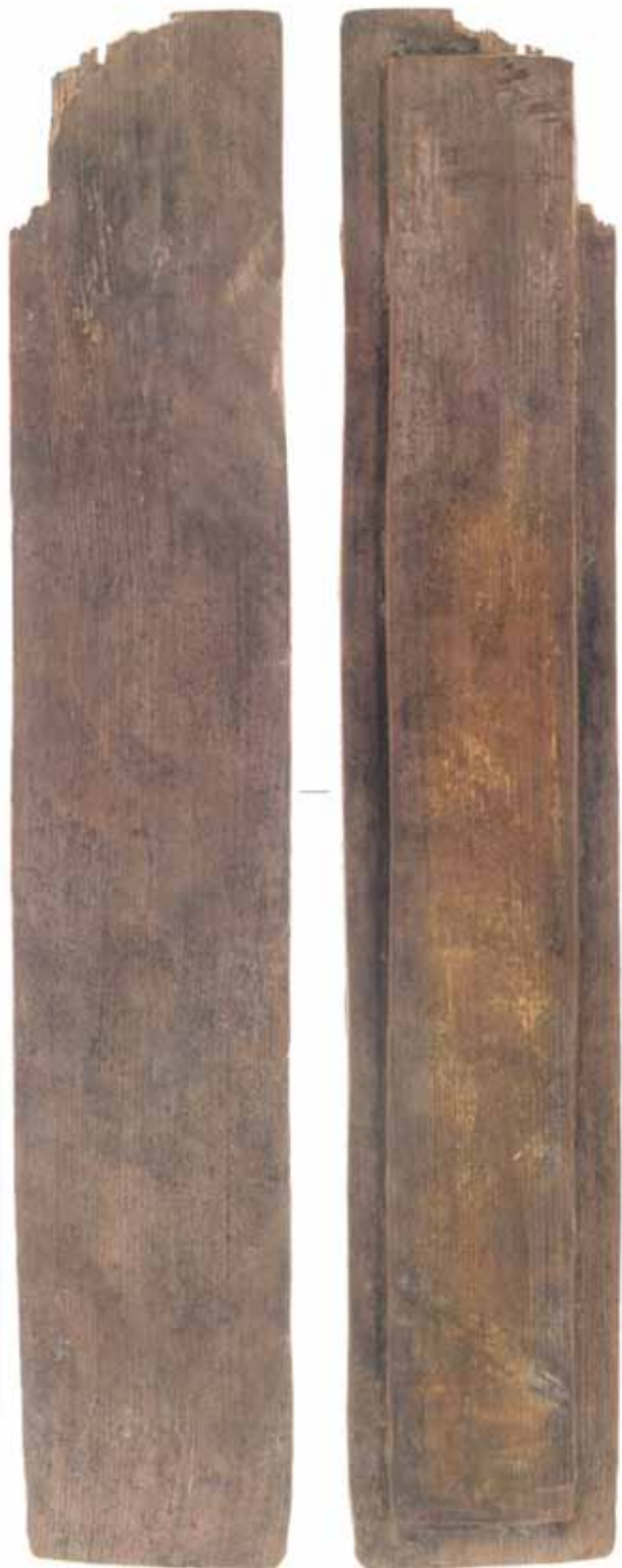


第5図 第89次調査区と城前地区官衙北西部の遺構

①「府符□郡司□」
〔諸カ〕



文字部分赤外線テレビカメラ写真
(任意)



表(上面) 裏(下面)

出土した文書函蓋 (S=2/3)



文書をいれた函(蓋)
松江市・出雲国府跡/奈良時代

第7図 鎮守府の文書函蓋

高崎遺跡第102次調査

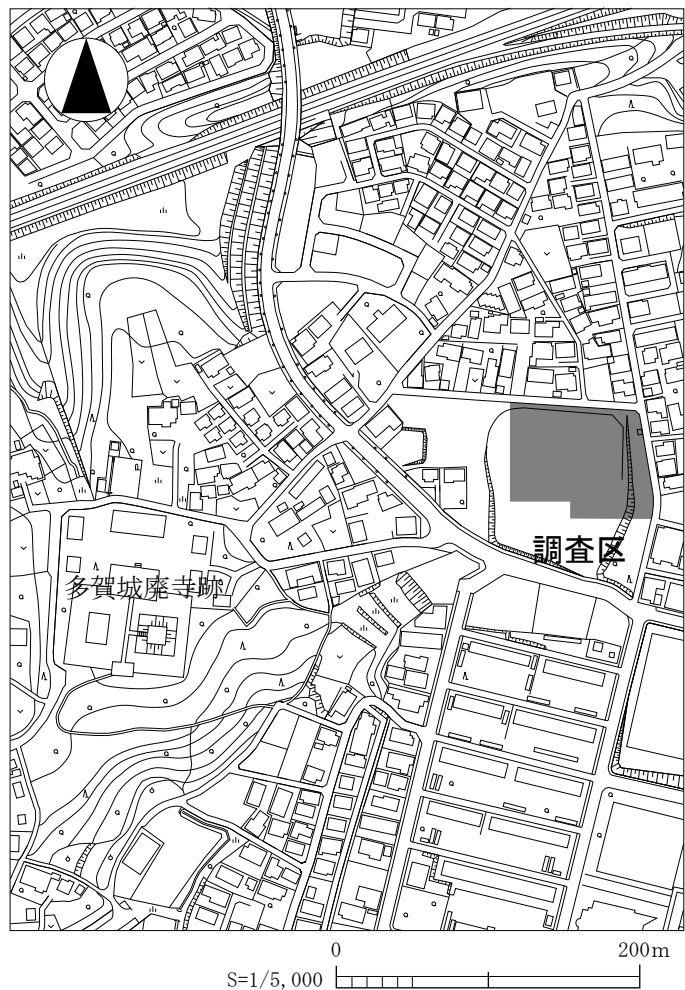
1 調査要項

所在地	多賀城市高崎一丁目 103 - 1
調査原因	宅地造成に伴う本発掘調査
調査面積	1,730 m ²
調査期間	平成 27 年 4 月 7 日～平成 27 年 6 月 29 日

2 遺跡の概要

高崎遺跡は、多賀城跡の南東に位置し、低丘陵の西端部に立地しています。東西約 1.3km、南北約 1 km の広い範囲を有しています。これまでの調査の結果、古墳時代（今から約 1,700 年前）から江戸時代（今から約 300 年前）の数多くの遺構・遺物を発見しています。特に奈良・平安時代には多賀城廃寺の西側（高崎中学校）で、約 60 軒の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡などが発見されています。また、井戸尻地区（高崎二丁目地内）では大量の灯明皿（とうみょうざら）が一括で廃棄された状態で見つかり、万灯会（まんどうえ）のような仏教儀式が執り行なわれていたと考えられています。

今回の調査に先だって、平成 27 年 3 月 3 日から 27 日まで確認調査（第 101 次）を行い溝跡、柱穴などの遺構を発見し、この成果を受けて第 102 次として実施したものです。なお、調査では遺構が発見された対象地の北側を I 区、南側を II 区としました（第 2 図）。



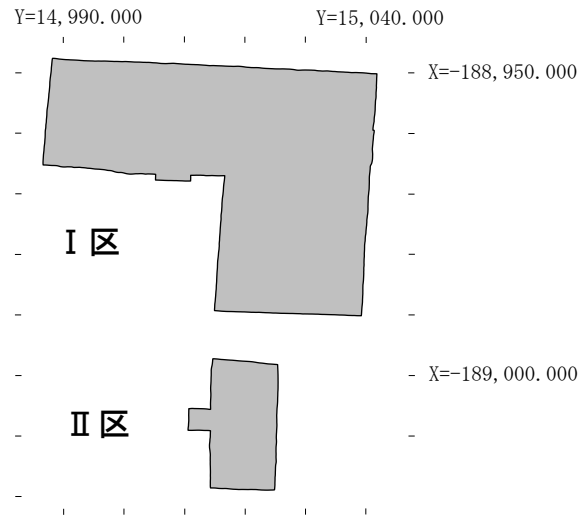
第 1 図 調査区位置図

3 調査成果

今回の調査で発見した遺構の内、主なものについて紹介します。

(1) 建物跡 (第3図 写真1・3)

I区中央部の北端部で発見しました。大きさは、桁行(けたゆき)3間、梁行(はりゆき)3間の東西に長い総柱の建物跡である。規模は北側と東側の柱列で見ると、北側は長さ8.55m、東側では7.15mである。年代は、出土遺物がないため、決め手にはかけますが、遺構の新旧関係から古代よりも新しいこと、周辺の調査成果から見て柱穴の形態などから判断すると中世頃と見られます。



第2図 調査区配置図 (I・II区)

(2) 柱列跡 (第3図 写真1・3)

建物跡の北側で、発見した東西2間(約5.4m)以上の規模があります。方向や柱筋が建物跡と同一であることから、建物跡と関連する施設と考えられます。

(3) 住居跡 (第3・4図)

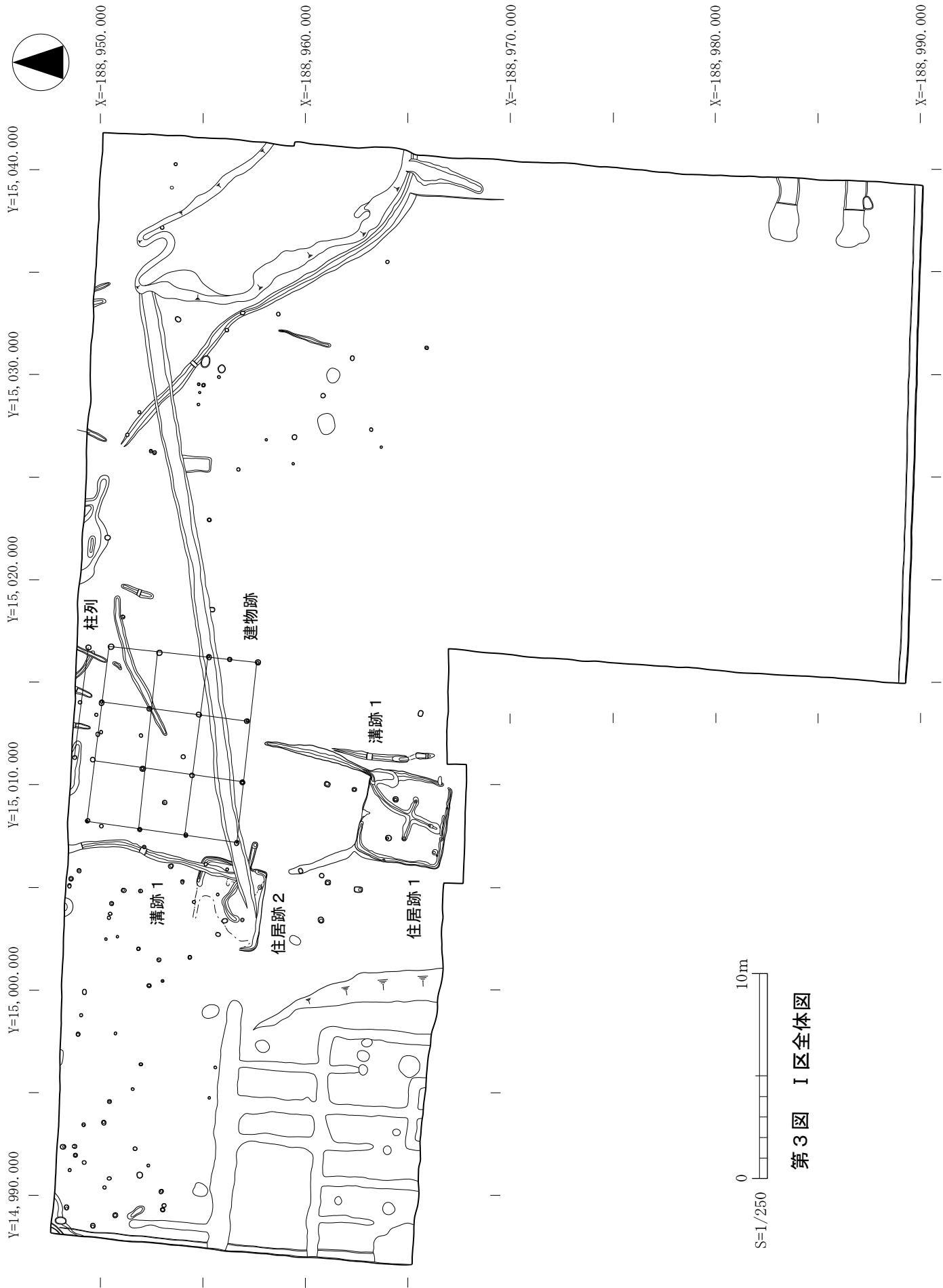
I区で2軒(住居跡1・2)、II区で1軒(住居跡3)の3軒発見しました。

住居跡1 (写真4・5)

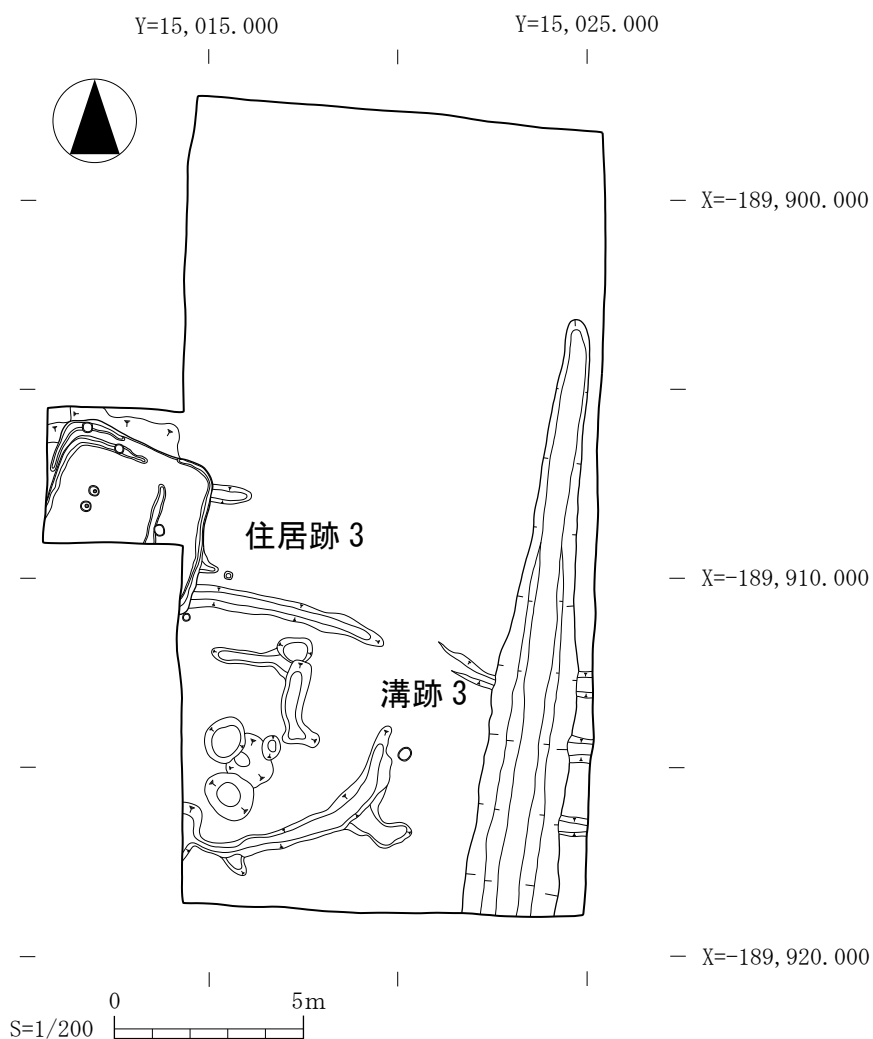
同位置で、同じ規模で1度建て替えられていました。大きさは北辺が4.4m、西辺が4.3mで、畳約12枚の広さです。カマドは確認できませんでしたが、カマド構築時の土の確認から、北辺の中央部あたりに構築されたと考えています。また、カマドの下部には丸瓦が敷設されていました。また、建て替え前・後には、それぞれ北西と北東コーナーから北に向かって外延溝(がいえんこう)を確認しています。年代は、出土した遺物の技法的特徴から9世紀の中頃と見られます。

住居跡2 (写真6)

住居跡1の北東側で発見しました。住居の北西部は削平のため、失われていました。大きさは南辺が4m、東辺が3.3mで、畳約8枚の広さです。東辺の南側でカマドに伴う煙道を確認しましたが、カマド本体は失なわれ確認できませんでした。南辺周溝(しゅうこう)には丸瓦が敷設されていました年代は、出土した遺物の技法的特徴から8世紀の終わり頃から9世紀の初め頃と見られます。



第3图 I区全体图



第 4 図 II 区全体図

住居跡 3（写真 7）

II 区中央部西端部で発見しました。住居の南側は調査区外に延びていくため、確認できませんでした。同じ位置で 1 度建て替えられていました。大きさは東西が 2.95 m、南北が 3 m 以上です。東辺の南側で建て替え前のカマドを確認しています。建て替え後のカマドは確認できませんでした。年代は、出土した遺物の技法的特徴から 8 世紀後半頃から 9 世紀前半頃と見られます。

(4) 溝跡（第 3・4 図）

I 区では 14 条、II 区で 1 条の 15 条の溝跡を発見しました。

溝跡 1（写真 4・5）

住居跡 1 の東側で発見しました。トンネル状に繋がる南北方向の溝跡です。住居 1 と関連のある溝跡と考えられます。

溝跡 2（写真 6）

南北方向に延びていく溝跡です。住居跡 2 と新旧関係があり、これより新しい

ことが判明しています。

溝跡 3（写真 8）

Ⅱ区の東側で発見しました。南北方向に延びて行くもので規模は長さ 16 m 以上、上幅 2.2 ～ 2.5 m、深さ約 1 m です。溝の北端は途切れていますが、これは削平によるものと見られ、さらに北側に延びていたものと考えられます。年代は出土した遺物の技法的特徴から 9 世紀中頃と見られます。

4 まとめ

- (1) 調査の結果、掘立柱建物跡 1 棟、柱列 1 条、竪穴住居跡 3 軒、溝跡 1 5 と多数の柱穴を発見しました。
- (2) 主な遺構の年代は建物跡、柱列は中世頃と見られます。住居跡 3 軒のうち、住居跡 1 は 9 世紀の中頃、住居跡 2 は 8 世紀の終わり頃から 9 世紀の初め頃、住居跡 3 は 8 世紀後半頃から 9 世紀前半頃と見られます。溝跡については、溝跡 1 は住居跡 1 と同年代、溝跡 2 は住居 2 よりも新しいことからそれ以降、溝跡 3 は 9 世紀の中頃と見られます。
- (3) 今回の調査では、瓦を使用した住居跡を 2 軒発見しています。このような住居跡は、多賀城廃寺の周辺で多く確認されています。
- (4) 当該区は周辺の調査成果から、古代から中世にかけて居住域として、長期にわたり土地利用されていたことを確認しました。



写真1 I区調査区全景（西より）



写真2 II区調査区全景（南より）



写真3 建物跡（南より）



写真4 住居跡1建て替え後（西より）



写真5 住居跡1建て替え前（西より）



写真6 住居跡2 (北より)



写真7 住居跡3 (南より)



写真8 溝跡3 (南より)

内館館跡第1次調査

1 調査要項

所在地	多賀城市南宮地内
調査原因	農村地域復興再生基盤総合整備事業
調査面積	平成27年度 7,800 m ² 平成28年度 7,000 m ²
調査期間	平成27年8月13日～平成28年3月25日 平成28年4月6日～平成28年8月30日
調査機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター (自治法派遣職員：東京都府中市、神奈川県)
調査協力	仙台地方振興事務所農業農村整備部、多賀城市市民経済部農政課、 宮城県教育委員会 (自治法派遣職員：長野県、兵庫県、岡山県、山口県)

2 調査の概要 (図1～6)

調査の結果、奈良・平安時代の集落跡と畑跡、室町時代の館跡が見つかりました。奈良・平安時代の主な遺構は、畑跡・掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡です。主な出土遺物は土師器・須恵器があります。今回の調査地は、古代都市多賀城から北西側に外れた場所にあり、都市の人口を支えるための食料生産地として利用された場所と言えます。古代都市と生産活動について考えるための貴重な成果となります。

室町時代の主な遺構は、館の堀跡・掘立柱建物跡・井戸跡です。主な出土遺物は

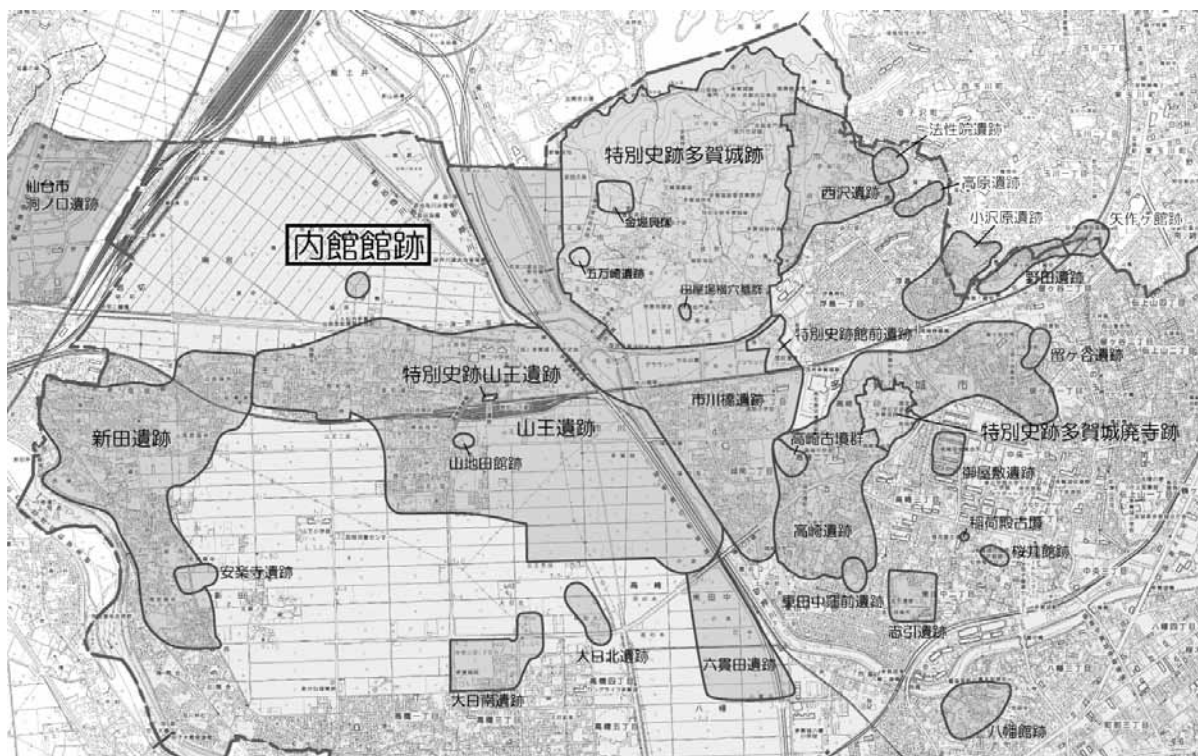


図1 内館館跡の位置

青磁碗・瓦質土器播鉢・漆器椀・下駄・柄杓・茶臼・銭などがあります。注目すべき成果は、地下の遺跡が地表の植物に影響を与えて生じるクロープマークが観察され、実際に堀跡が見つかったことで、全国的に見ても貴重な調査例となりました。館を区画する複数の堀が巡り、区画内部に掘立柱建物・井戸跡などの施設が見つかりました。



図2 平安時代の畠跡



図3 平安時代の井戸跡



図4 室町時代の漆器椀



図5 柄杓

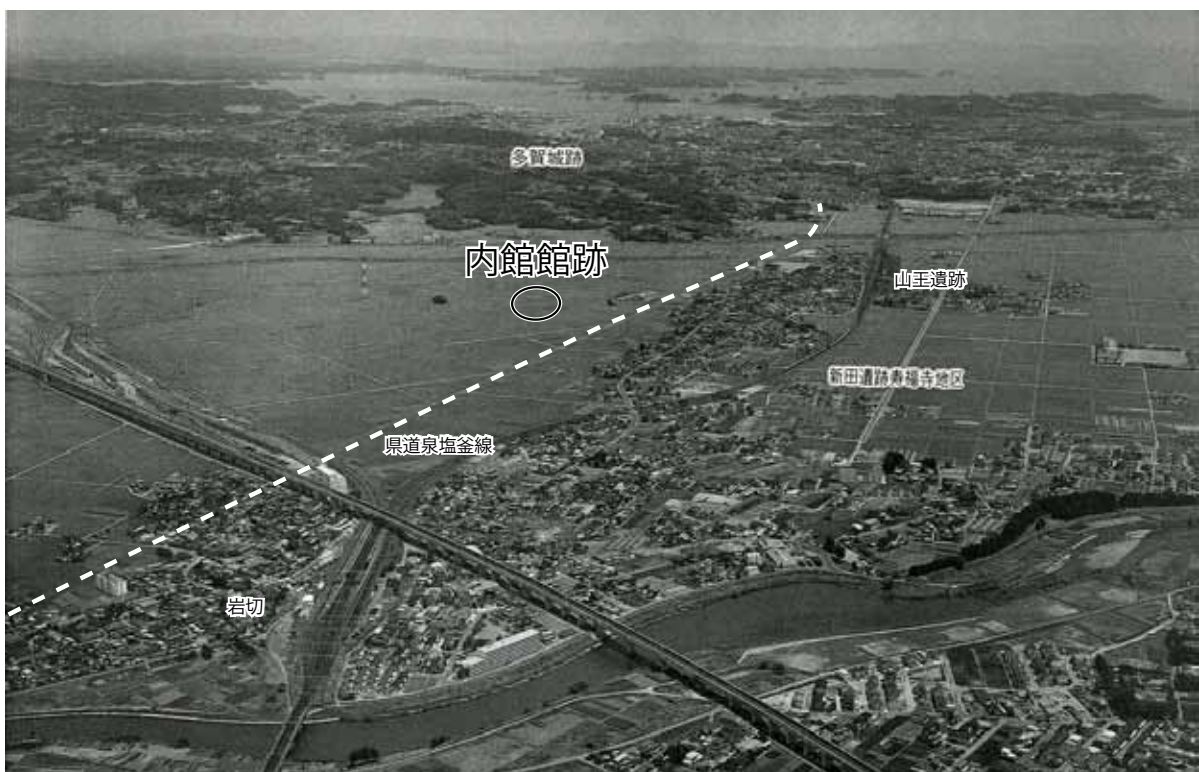


図6 内館館跡の位置 南西から（航空写真）

3 内館館跡の調査

① クロップマークと堀跡の調査

クロップマークとは、地下の遺構が原因となって地表面の乾湿に影響を及ぼし、それが植物の生育に作用して形成されたものです。湿ったところでは生育がよく、乾いたところでは生育が悪いため植物の背丈に差が生じ、航空写真などで確認することができます。内館館跡では調査以前に確認されていたクロップマークどおりに堀跡を確認することができました。

図7は、調査前に内館館跡の航空写真で確認されたクロップマークです。緑色の稲田の中にうっすらと黒い帯が確認できます。図8は、稲刈り後の調査時の写真です。手前の調査区内に見える黒い部分が堀跡で、奥の推定延長部分で草が伸びていることが確認できます。

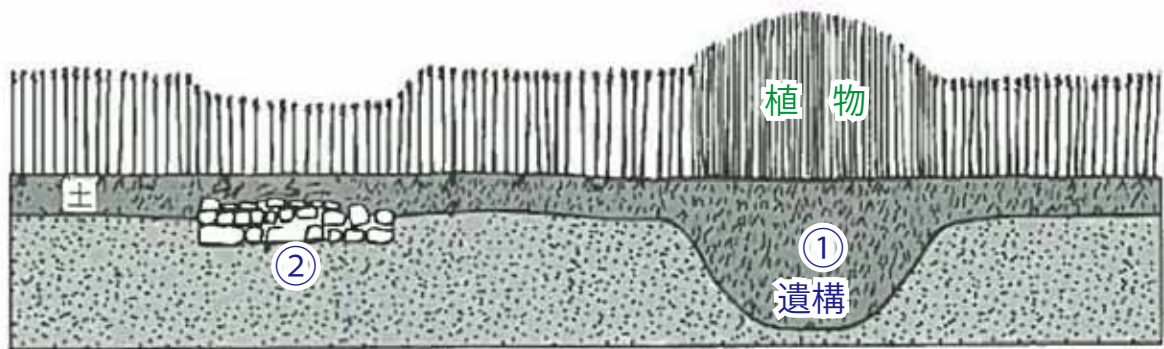
クロップマークが確認された遺跡は全国的にも珍しく、群馬県西組遺跡（古墳時代集落跡）、群馬県三ツ寺遺跡（古墳時代豪族居館）、茨城県台渡里廃寺跡（古代寺院）、茨城県井上長者館跡（中世館跡、図10～13）などごくわずかしきありません。今回の内館館跡の発掘調査によって、地下の遺構とクロップマークの関係を示す重要な調査成果が得られました。



図7 内館館跡のクロップマーク（航空写真）



図8 内館館跡のクロップマーク(地表面から)



コリン・レンフルー、ポール・バーン(池田裕ほか監修訳)『考古学-理論・方法・実践』より

クロップマークの形成

①のような深く掘り込まれた遺構のところでは土が湿って植物の生育がよく、背丈が高く伸びる。また②のような構造物の上では成長が阻害される。このような違いは地上ではわかりにくいですが、空中からは異なった色をした植生の帯として見えることが多い。

図9 クロップマーク形成模式図

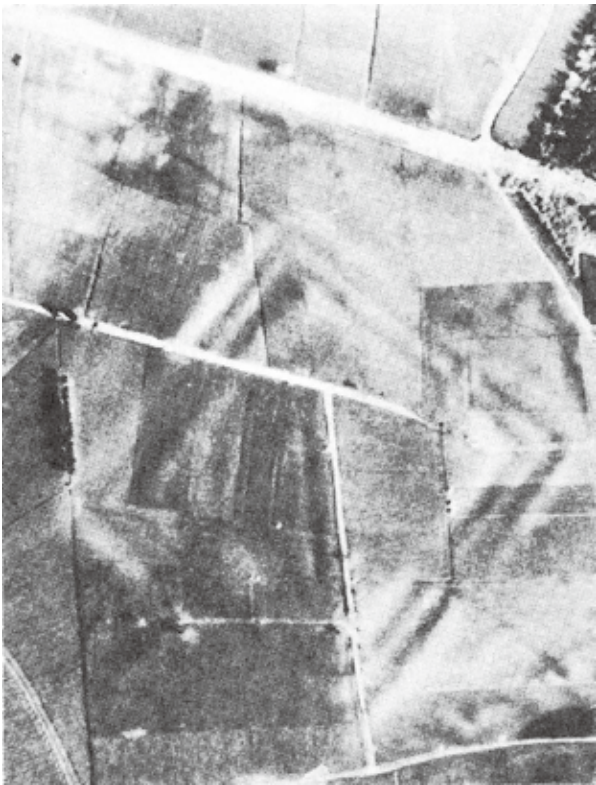


図10 井上長者館跡のクロープマーク
(報告書より転載)

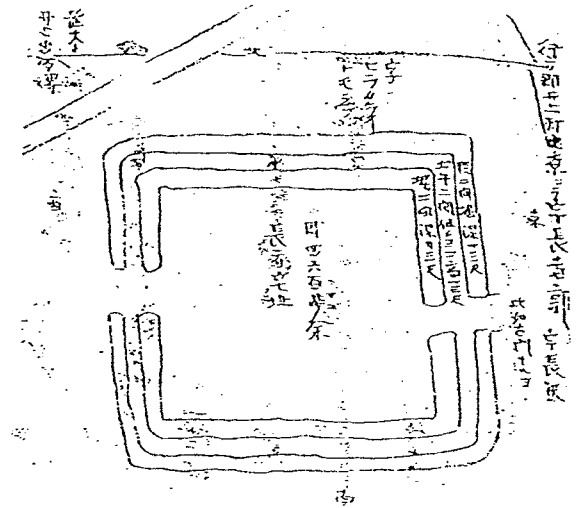


図11 井上長者館跡の絵図
時期不明 (報告書より転載)

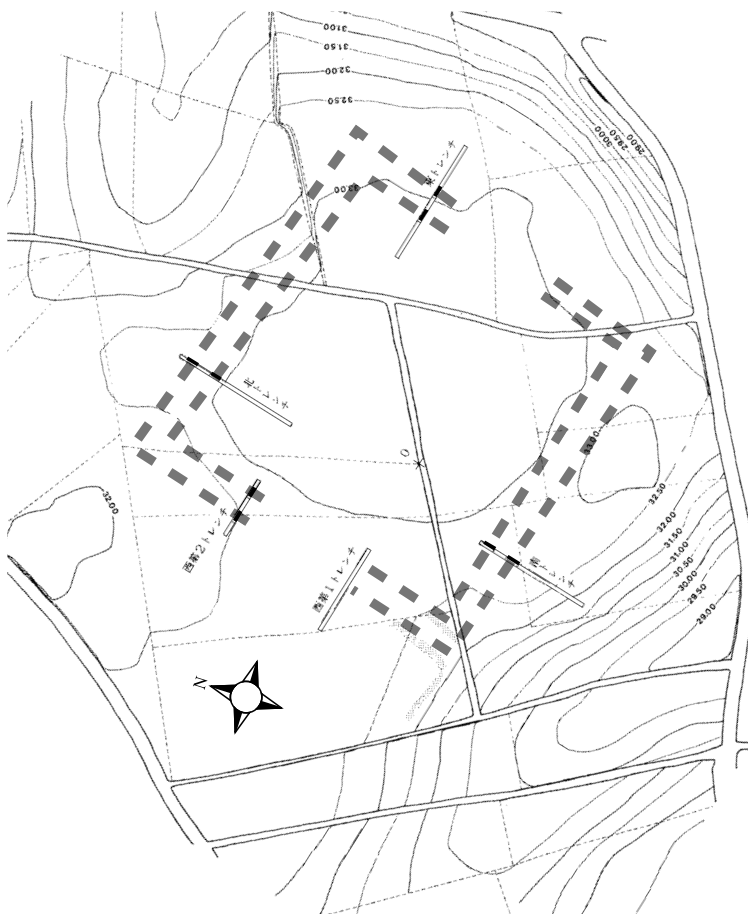


図12 井上長者館跡 堀跡
第2トレンチ東から
(報告書より転載)

図13 井上長者館跡
遺構全体図 (報告書を
一部改変して転載)

井上長者館跡はすべて 玉造町教育委員会 1990『行方郡井上長者館跡確認調査報告書』による

②内館館跡の構造（図14・15）

内館館跡の堀跡は規模の違うものが複数巡り、東側に歪んだ方形の区画（東区画）、西側にそれに接続するように方形の区画（西区画）を形作っています。

東区画は2つの四角形が接続したような歪んだ方形をしており、2本から4本の堀跡が巡り、西区画は東区画に接続する方形の区画でやはり2本から4本の堀跡が巡っています。堀跡の規模は大きなもので幅6.0m、深さ1.0m、小さなもので幅2.5m、深さ0.5mあります。館を囲む土塁は見られません。堀の内側では掘立柱建物跡や井戸跡など、館の主が生活のために使用していたであろう施設の一部が見つっています。

出土遺物から今回明らかになった内館館跡の年代は16世紀（1500年代）＝室町時代とわかりました。高級輸入磁器である青磁碗や井戸跡から出土した赤い漆塗りの碗などは館の主の財力と生活の様子をうかがわせます。

今回は調査範囲が狭く、堀によって形作られる区画の形状や内部の施設はごく一部しか確認できませんでした。

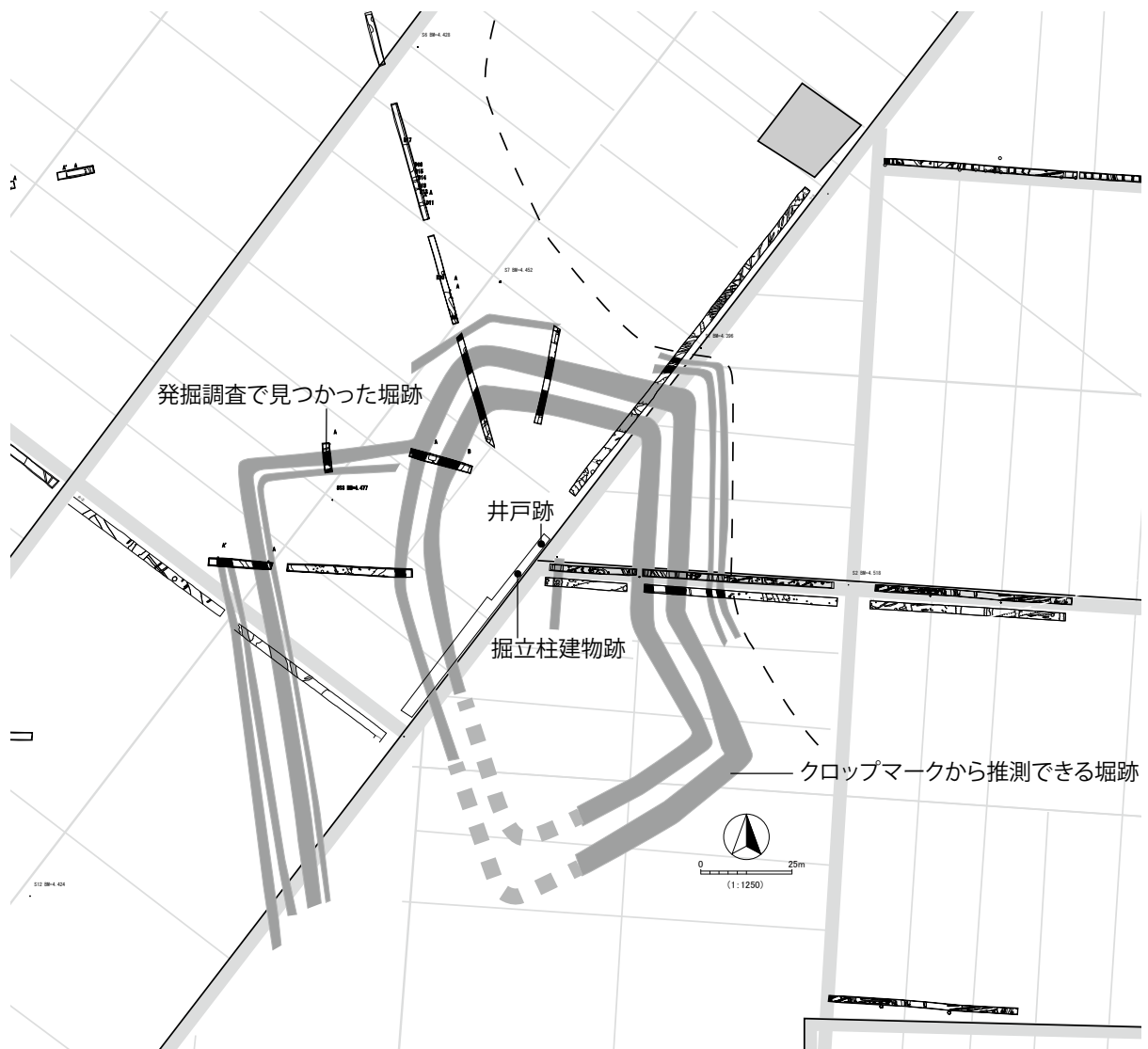


図14 内館館跡の構造



図 15 内館館跡の主郭北側堀跡

③内館館跡と留守氏

戦国時代の武士 留守顕宗（るす あきむね）の隠居後の所領を記した「御中館之御分帳」という文書があり、留守顕宗という人物が、隠居後に中館と呼ばれる館に住んだことがわかっています。留守氏は鎌倉時代の初めに源頼朝によって、東北地方を治める重要な役職である陸奥国留守職に任命された一族で、多賀国府（多賀城の機能を引き継いだ中世陸奥国の統治機関）周辺に一族や多くの家臣が根付いたと考えられています。顕宗は留守氏 17 代当主で、1567 年（永禄 10）に家督を譲り、1586 年（天正 14 年）に亡くなったとされています。「御中館之御分帳」の顕宗の所領には「南く（南宮）」「南んくや地（南宮谷内）」「けあけ（毛上）」といった土地が見えることから、多賀城市何宮周辺に所領を持っていた留守顕宗が、中館と呼ばれる館で隠居生活を送ったと解釈できます。

図 16 の多賀城市の小字を見ると、現在の地図にも載っている南宮や色の地といった地名が見られ、その中に小さな「内館」の小字が見えます。この場所が内館館跡の位置で、やや特別な場所であるかのように感じられます。「内館」を「なかだて」と読めば留守顕宗が隠居生活を送った「御中館」がまさに内館館跡ではなかったかと想像可能であり、出土遺物から得られる内館館跡の年代とも符合するものとなります。

今回の発掘調査では得られた情報が限定的であるため、未だ確証は得られませんが、内館館跡が留守顕宗の館跡である可能性が高いと言えるでしょう。さらに付け

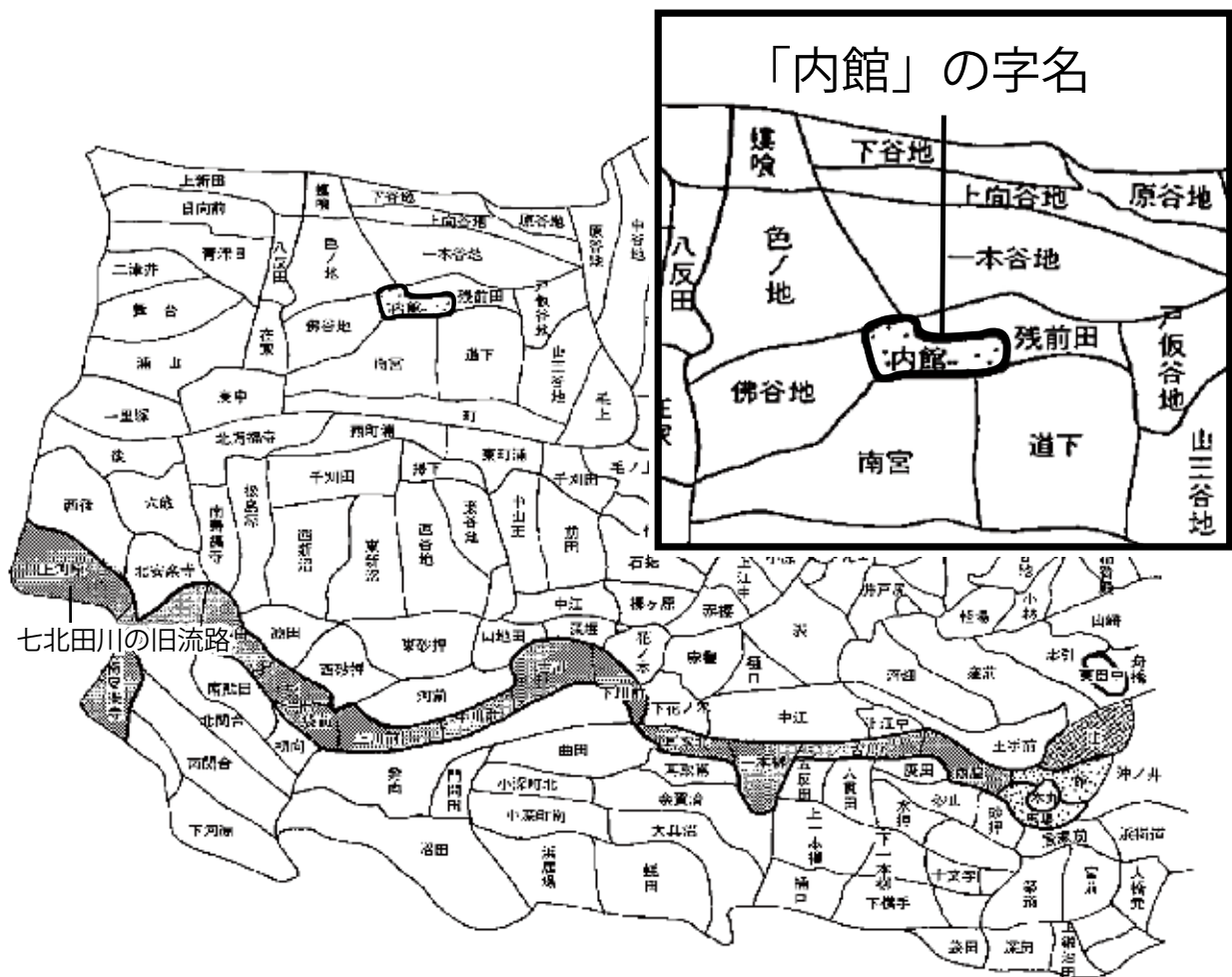


図 16 多賀城市内の小字

加えると、発掘調査では時期不明の堀跡などの遺構が多数見つかっています。今後の調査によっては、顕宗以前の館や、新たな発見も期待することができます。内館館跡は、多賀城市域の歴史を考える上で重要な役割を果たす遺跡です。

参考文献

コリン・レンフルー、ポール・バーン（池田裕ほか監修訳）

2007『考古学 - 理論・方法・実践』東洋書林

多賀城市 1997『多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世』

1985『多賀城市史 第5巻 歴史資料（一）』

田中則和 1993「仙台市洞の口館跡の地表顕在遺構」『六軒町中世史研究』

玉造町教育委員会 1990『行方郡井上長者館跡確認調査報告書』

奈良国立文化財研究所 1991『埋蔵文化財ニュース 71』

文化庁文化財部記念物課 2010『発掘調査のてびき - 集落遺跡発掘編 -』同成社

吉田東伍 1970『増補 大日本地名辞書 第7巻 奥羽』富山房